

畫本西遊全傳

四編六



遠21
2500
46-36



門へ遠く
2500
巻40-36

油漬



繪本西遊記四編卷之六

岳亭丘山譯

三僧大戰青龍山

四星挾捉犀牛怪

斯て三個の妖精行者を追退け小妖們と俱小門裡小引
入少時歇息て在る處小不彗時行者八戒汝僧を従へ
赤門外小責来つと八戒旦前小進と釘鉞を擧て石門を突
碎き油を偷む大賊怪快く師父を返せと呼つと三僧
の妖怪大の小怒つと亦小妖們を率領打て出更小一言と
も交は三妖怪と三僧と千變万化の術を尽し時移るまで
戦ひたる数千の小妖前後より指挾と主小力を添たる程小
八戒汝僧力疲へ彗勢に敵する彗能以兩個とも遂小大勢
の爲小生擄とる行者是と看て斯て不當と思ひたる

繪本西遊記四編卷之六

急小困を脱出て空中小昇つて嘆息し今我一個小
く救ひがて快く天上小去て加勢を請へんと急小亦筋
斗雲小打跨女時の間小西天門小飛到る此時太白金
星那里小左て行者が慌忙く来るを看て迎住て曰く
大聖今何寺の軒有て斯周章く来つとあや行者則ち昨
日よりの光景を仔細と説話万望彼妖怪と亡し師徒三
個一救ひ出さん為今天宫小来つと加勢と請んと做ら
つと云々此の金星呵々と笑て曰く彼三妖の犀牛の精
つと申年修行し能雲小駕霧小歩て江海の中小在る水
道と聞き三個ともに大神通あり若他を捉んと思つ四木
商星小請あり忽ち他們を降伏せし行者問て曰く四木

商星との誰うぞや万望のその在室を教め金星曰く四木
星官の斗牛宮外小在大聖快く玉帝小奏聞くわが分
明小知侍のん行者則ち金星小拜謝し別を徑小通明
殿小到り四大天師小見て央と彼四木星官を央て三藏
師徒を救ん変を奏聞く四大天師這由を奏しわがを
玉帝此由を聞ひ遂小奏小准りて角木蛟斗木獬奎木
狼井木犴の四星を宣ひ行者に加勢はべた由を命
じめひ々此の四星官命を畏て急ぎ準備を做則ち行者
と打列て頓て下界小降をり行者心裡小打笑ひ四木
星官を何人ぞと思ひし是原来二十八宿中の四木星小
在るなり彼張煠老子明く我小告ざりし何事小やと



四木星官
悟空小加勢



獨言ひとりごとながら四星官せいしんくわんを導引まもひて遂ついにに青龍山せいりゆうざん小こぞ下くだり
行者ぎやうじや曰いく星官せいくわん女にょ時待ときまちる我われ且また他た們らと傳引たづね出で候まちの
んと勿なほ心こころち洞門どうもん小こ臨のぞんで大音だいおんに呼よつて大賊だいぞく怪快かいく師父しふ
を出いせと叫こゑひるまへ三個さんごの妖怪ようかい此こゝを聞き着き彼か猴さる亦また
来きつて門外もんがいを闹さわげ疾打はや拿とよと呼よつて亦また許ゆるすの小妖よう
と牽領けんりやう門外もんがい小こ跑はしり出で行い者じや小こ向むひて戦いくさんと後のち更さら
小こ立たつる四星官せいしんくわんと看みて大だいいふ小こ飛と鳥と我われ輩らが大敵てき未まだと
て狼ろう狼ろう嘍ろうぎぎ衆しゆ妖よう個ご々々本相ほんさうと現あらひし許ゆるすの小妖よう們らの山
牛水牛ぎゆうすいぎゆう黃牛わうぎゆう們らの精せいとう思おもひく小こ逃に去き行い彼か三さん個ごの妖
怪かいの三さん隻しつの犀牛さいぎゆうと現あらひし東とう北ほく小こ向むひて脱だれとると行い者じや是こゝ
と看みて井木いぼく行角ぎやうかく木蛟ぼくせうと諸しよ俱く小こ彼か三さん妖よう小こ從したがひて連行れんぎやう

らる斗と木ぼく獬せと奎木けいぼく狼ろうの小妖よう們らを山さん谷こくの間ま小こ追入おひいれ許ゆるすの
牛精ぎゆうせいを盡じんく打殺うちころす伎ぎ英えい洞どう小こ尋入ゆみり三藏さんざうと八戒はちがい沙僧さそう們ら
郷きやうめを脱出だつしゅつせを沙僧さそう原げん来らい二星官にしんくわんと能よく認得とくると再また三
恩おんを謝あやまりて曰いく二星官にしんくわん奈な何なにと愛あい小こ未まだと我われ輩らを救すくひ
めのうらとと問とふと星官せいしんくわん答こたへて曰いく行い者じや則すなはち玉帝ぎよくてい小こ奏
し援兵えんぺいを要いふと吏しと語かたりし今いま已まだと洞中どうちゆうの小妖ようの残のこりと七
ひつり捲簾けんれん大將だいしやうと天蓬てんぽう元帥げんすいと旦師たんし父ふを守護しゆごして飯い
めの大だい聖せいと井角いかく二星にしんの二妖によう怪かいを追行おひいり我輩われらも亦また那な里
小こ追行おひいり大聖だいせい小こ力ちからを合あはせて妖怪ようかいを拿とり来きるべしと云い畢ひつと
て奎木けいぼく二星にしん雲うんと縦たづつて東とう北ほくを指さして飛とまりぬ三藏さんざうの再
三二星官さんにしんくわん小こ稱謝しやうしゃしぬ八戒はちがい沙僧さそうの輪番りんぱん師父しふと背負せおひ互たがひ

に神通を使ひ空中を走つて慈雲寺に帰るる才木禪
奎木狼の二星官の雲小打乗て東北小往ら亦西洋大
海小轉し不爰時海上小到り行者が海上小在て叫び言
るを見着大聖我輩来じつと叫びつる行者惟喜ぶ
曰く二個の妖精今遠海中小潜り入井角二星是と跟
て入るる二星官女時爰小待め我水中小入て打探来
るべしと頓て辟水訣の法を念へ波濤を固き直小海底小
分入るる彼三妖水底小在る井角二星と相敵と一没
命的と戦ひ居るる行者亦爰小起来ると看て不當
とや思ひらん再般崖上小向ひ逃登りつる待設るる奎斗
の二星飛跑て遂に辟塵犀と打殺し辟寒辟暑の二妖

怪是を看て亦水中小逃入るとまゝ處を井木行跳り出
て辟暑犀と打殺し角木蛟飛躍て辟寒犀と打殺し
三個の妖怪皆一齋小亡びつる行者大い小権喜見ち二
個の犀牛と取集め四星官と俱小皮を剥角と取つ洞
中小到りて師父を救ひ出さんと云けるを奎斗二星是を住
めて我輩向小師徒二個と助け出り慈雲寺小皈し待ひき
今の程ハ疾那里小到り着しつると云々つる行者愈惟ひ
遠小四星官と同伴雲を繼つて金平府小飛飯り慈雲
寺小到り二藏首め衆僧們小此度と仔細説話聞せ
を二藏深く感敷し慈雲寺の衆僧們ハ一向驚き此四個
和尚輩ハ俱小活佛の降臨しつるつると個々各自と焚香と

備て礼拜を行者此時四木星官小拜謝し四隻の犀角と
 四星官小共へて玉帝小奉上ん更と願ひしは四星官大
 の小勸喜遂に二藏師徒に辞し別は天上に還りぬひる
 行者亦一隻の犀角を志心聖寺小納め一隻の犀角を本府
 の官府君小呈上し彼假佛の妖怪と收めしを此後元
 宵金燈小許夏の油若干の黄金を費は更有へくはと
 告解しる程小此更既小金平府中小隠さるく聞傳へ
 云傳へ金平府の刺史佐戴郎官寺の官負盡く志心聖寺
 に詣来り其外大小の人家の老弱男女都て寺中に来
 り唐僧師徒と拜し亦天を仰て四星を拜し勸喜稱讚
 の声天上地下に震ひるる志心聖寺と首とて本府大小の

官負輩個々感激小堪は師徒四衆と府正殿中に請
 大の小素筵と安排し方般と管待する亦自天天懸二百四
 十家の賣油大戸の輩我活佛の力小依て数万金の
 費と出さ遠大恩念慮と報し奉らんやと一家毎ふ一席
 の宴を設し二藏師徒と請て供養し二百四十家の大
 戸と毎日輪番供養をくると誓言住二藏師徒と堅く住て放
 こざりたるは二藏没奈何志心聖寺小滞留し毎日一家の供
 養を受めし不期一月餘と過りたるは二藏一夜暗ふ行
 者を呼て我輩衆と貪つて無益の日數と費さば何事の
 時を経と求るの業と果さんや却て佛祖小罪せらるる禍
 と生じて我思ひぬ賣油大戸の輩を敷き今夜明ざる

四星官
悟空
犀牛怪
と唐金
と



間小這寺を忍び出急ぎ西方に向んと思ふなり此言大奈
何と曰へを行者是と聞て點頭這言大の好我も疾
より斯思ひ在りたり然を私小準備を做へると半夜悄々
と行李を整理へ五更の時刻八戒と呼く馬を準備せよと
云々を八戒眼を搦く曰く未ご夜の明ざる小馬を準備
て何小為や行者曰く你疾く起來と師父路小赴きりふ
る八戒曰く這那の支ぞ二百四十家の大戸の者ども都て我
輩と請待は今終小二十家むかりの齋を受心塵却て路
小出て飢を忍ぶや三藏是を同て鼓子快く起來と若再び
乱説と吐を悟空小棒を以て今為打と言つと多く八戒慌
忙驚き急ぎ起出來つて曰く師父奈何をば這樣小心
を素ぬふ常に我と愛しぬ小今日却て我と打しめんと
曰くや行者曰く師父你が此角を貪つて路を恨過更を怪
とみ小快く馬を備へて路小赴き打り更を脱しよと亦汝
僧と呼起し行李を擔せ馬を牽せ悄悄小山門を聞き
遠小這寺を忍び出師徒四個路を急ぎ暗きと厭むと走
り

給孤園問古談因

天竺一國朝王遇仙

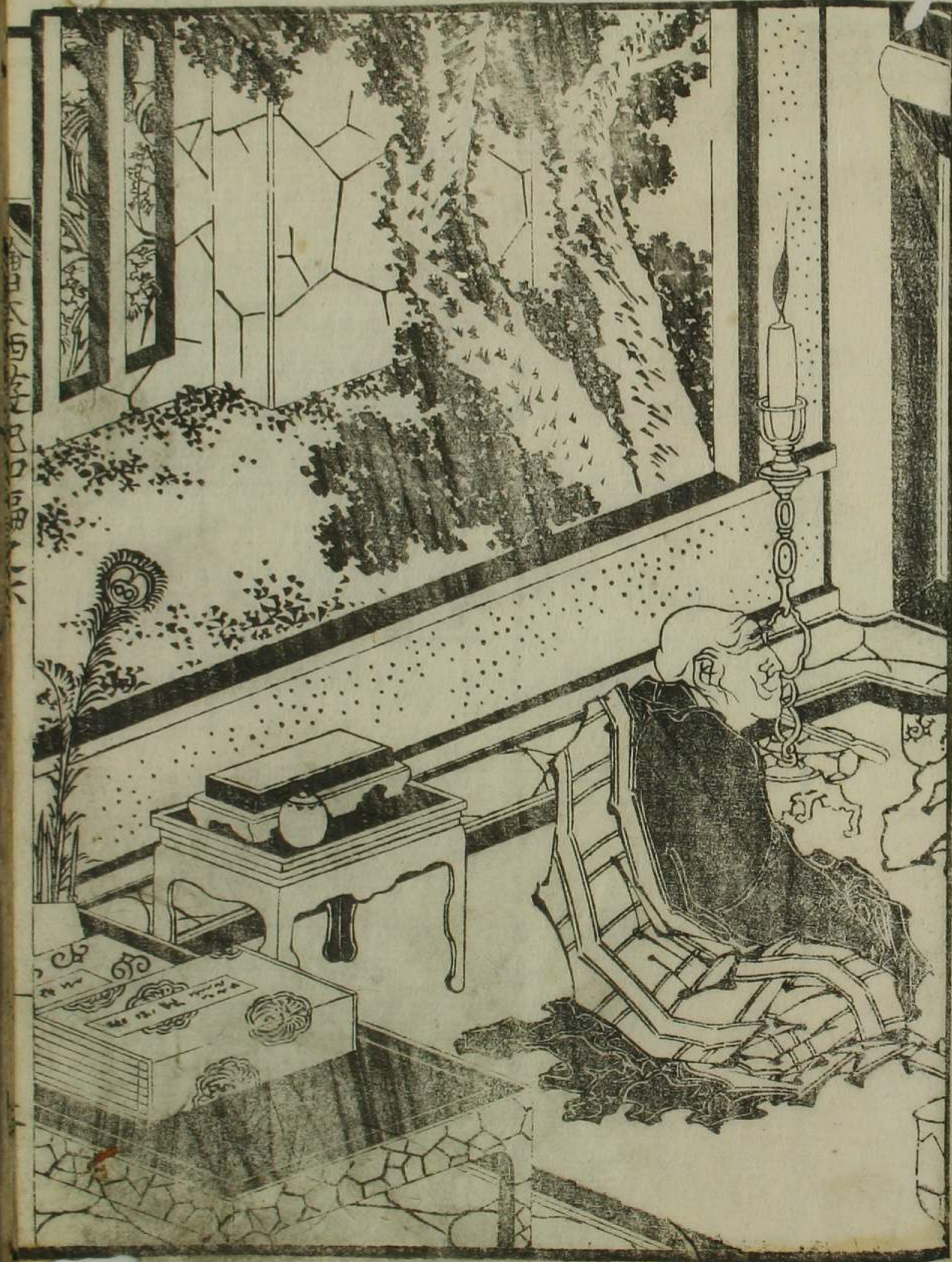
斯て唐僧四衆の慈雲寺を出てより風小冷し水小宿し
路上平安小羊月余を過一座の高山小度つて山の那辺
小到し路傍小一字の大寺あり山門の額小布金禪寺と
寫し入り二藏是と看て沈吟し是舎衛國の界小有はやと

曰へを八戒手と拍て驚いて曰く我師父此幾年路を識り
夏と見れば今日却て此地を識りや三藏曰く路を識る
小有は我曾て經典の中小於て見し夏有佛舎衛國の祇
樹給孤園小在せし時給孤獨長者滿地小黄金と布滿
して太子の祇園を買得し夏あり想小這寺布金寺と号し
は這故夏に因てすんり然を舎衛國の界小有はやとの云
る我輩今は寺小入て一泊を央むべしと遂小個々山門小前
こ入を金剛殿の後邊小一個の禪僧立出て長老の那畢より
来つとゆふごとと向三藏答て曰く貧僧の陳玄奘則ち東土大唐
白王帝の旨と奉り西天大雷音寺に到り佛と拜し經を求
るの僧なり今日已小天晚小及ぶ今宝刹を過る小依て一宿を

要ん夏と田ゆ万望は是を惠とめ人禪僧の曰く荒山の十方
常住の寺にして個々便宜に隨て居住を假況や長老と東
土の神僧より我寺の供養を受めり是荒山の侍僂なりと
遂小三藏四衆と方丈小導引入個々座定りたる此時東土
大唐の聖僧来し夏を聞傳へ常住掛搦を問じ長老行童
都て来て相見え個々三藏の威儀を義と亦徒等們が異
形を怪とる既小しと行童嚙と備来つと師徒個々命を
食し早つと三藏寺僧小對ひ布金寺の来因と問ふ人を寺
僧答て曰く這寺の原舎衛國の界あり給孤獨園寺
と云り給孤獨長者佛を請て經を講し給りめん為に
若干の黄金と地小布滿して要め得る地あり故小布金

寺と改めり此寺の前面に則ち舎衛國小と此地の長者
の祇園より寺の後邊に祇園の基趾より若雨霽々小遇時
の或の金銀珠玉を淋ぎ出さ時、是を拾ふ者あり三藏是を
聞て仏經の言葉寔小憐とて遂に行者を扯列り堂
を下りて閑行し爰那里と徘徊し看歩さる處小一個の老
僧出来りて三藏小對ひ礼拜を三藏急ぎ身を轉りて彼老
僧を看ゆふ小年齢百歳小余りたる光景小て眉小八
字の霜を双べ手小竹杖を携へ三藏と行者小相見え深
く道心の堅きを稱賛し弥多時説話を俵三藏を道引く
祇園の基趾小到り左右さる間小既小初更の空近く月明
く小風清く三藏往時を思ひ今を憐れ座小感涙を催し

の處小不思議や這時那里ともく人の哭悲むき風小
従ひて聞えり三藏是を聞て更に哀歎小堪は他と那
個小何の故小哭小やと同め人を彼老僧是を看は且一
邊小在り道人行童們小命して你们快く茶を準備て来
しと云て大家寺に皈遣一辺小人無を看て俄小又三藏を
拜しなむ三藏是を住めて曰く老院至何の故小這禮を
倣ふや幹有を速小語り多人老僧則ち三藏行者小對
て曰く予子齡已小百餘歳今や魚量の人物を看と雖
も曾て両長老の如きを看は予子既小長老輩の尋常
の凡僧小有ざるを悟り當下の哭色の更長老師徒小
有るんを管は年明を得難し今仔細小其故を語り侍



公こうのの孤こ園えんのの三さん藏ざう女にょのの泣な色しきをを怪あやむ

魚うし之の西にし遊あそ言こと山さん録りく之の六む

人舊年の今日天子月小對心と澄く在る時節勿心ち一
 陣の風响さ人の哭声有とまき我這祇園の基址小尋す
 未と一則ち一個の羨貌女子爰小在何個そとヨ等との答て
 り我の天世二國王の公主なり今宵月下に有て花を看と
 と風の為小刮とまき爰小来ると云つ我則ち他を二固の
 空房の裡小入堅く鎖し門上に孔を穿ち其孔中より
 食を送り衆僧們を騙して他の一個の妖邪なり我法力を以
 て他を鎖し毎日兩般の茶飯を與へて命を繋しむと云傳へ
 置彼女兒も亦聰明て衆僧們小汚さむん更と怖と白晝小
 乱心の若く万般の乱言を吐夜静し人無時の時々父母
 の更を思ひ出ると今の如く啼哭を我まじ樂番ら城中小進

皇宮公主の消息を打探見小城中の公主も亦更に
 恙なく御座在些少の騒ぎも亦還て彼女子を打探し是
 亦何の怪氣も無く皇宮小在時の更を問を何更も速に
 答とまを我奈何とも此虚実を明白小做と能はれ今夫
 倅小老師爰小来るとみ万望の國中小法力を廣く施し
 此虚実を辨明し何止のハム主が真らるや妖らるや一固小良
 善を救ひ二固小神通を露しの人三藏行者是を聞て老
 僧の史と定耳に領諾し吾們不遠是を明白小為べた
 りと遂に老僧小別と去く寺中小飯して安歇たり次の
 旦疾起出齋を吃し頓て寺僧小辞し別と二藏師徒と大
 路小出已の剎頃小金城の中に前と入會同詣小到し駟座

相見え東土大唐より来りし由と仔細説話多し
 驚き日正堂に請ふくまじの四衆一斎小館
 駒亟小向ひ本國の歴年を問ふへも駒亟曰く
 天竺二國大祖太宗より今に至り五百余年
 蒼木を愛し給ひ怡宗皇帝と號し奉り年号を靖安と
 改元あり今巳小二十八年なり二藏曰く今日貧僧入朝して
 関文と換ん度と願ふ万歳祈々今尚朝小在座候んや駒亟
 曰く皇帝一位のハム王娘々あり年巳小二十歳なり今天替
 小因て十字街上小高殊樓を結ひ綉毬を抛打く駒亟を
 招きぬふ今日正に其日小當る思ふ小我王此消息を聞ん為
 小未ご朝を罷きぬべうらに関文を換んと思ひぬ快く入朝

くゆへ二藏曰く天替との奈何する度と駒亟曰くハム王娘々
 今年二十歳小成ぬ小因て駒馬を要ぬとも未ご無這故
 小十字街頭の賑ふた地方に高樓を結ひ公王此樓上より
 今日綉毬を投下し其毬小中アくる人を昇て駒馬と走ぬ
 浴へんとり是と名て天替との号なり長老今日朝小入ぬ
 其處を通りぬへ一日く看住し去ぬ人二藏是と聞日平斎
 を吃し畢つと袈裟僧帽を更めて行者を列し立山ぬ人たを
 八戒も同く去んと為と沙僧扯住めて二兄日住と你的嘴
 臉を城中の人小看ハ管に許すの男女と驚し或ハ竟を引
 出さん長兄一個遣して吾們二個の爰小在て待べしと云々
 八戒も没奈何遂小駅中ぬ住し二藏の行者を引領朝

門小望んで急ぎに果くと前面の十字街上一に一座の高練
樓あり其四方に士農工商の輩都て街上に立集り八公主の
迷小中つと巴国王の駙馬と為へくと数万の若冠練樓の下
に集り八公主の迷を抛るを待居り二藏是を看て我輩が
眼色便りて這處を過る小百てかると曰へ行者曰く師
父布金寺の老僧が央へ更と志とめや我固小の練樓
を見二固小の若公主と看り其虚実を弁びべ二藏是を
聞り亦行者と俱小萌と去め原来此八公主一個の妖邪の
と前年本國の公主御花園小月を賞り居ぬいと這妖
邪提拿て他處小移り自己却て彼小公主と變り唐僧の
今年今月今日今時此處小到るを知他を招きて配合元

陽の氣を取て大乙上仙と成んと計り練樓を準備り待
り處小午の三刻小當り果然唐僧練樓の下に進み来
り公主の香を焚て天地を拜り左右小七八十個の官女を
従へ手親綉練と取て樓上より抛下り入小直小唐僧の昆
盧帽子に打當り當下樓上樓下一齋小呼り嚷き採女宮
娥大小の大監们都て樓を下りて二藏を拜り貴人快く朝
小入り賀りめんと嚷き合の二藏驚き慌忙急ぎ行者と扯り
此寺又心腹をんきと曰へ行者低語て曰く憂めん更勿れ我
の今より馭館小返り八戒汝僧と俱小万般の準備を候り
待候ん師父且朝小入若公主師父を招りどんバ快く関文
を倒換て出め若亦八公主師父を招り替婚せんと要を

和歌の
三下
公の
主の
蔵の
留る



國王くわうこくふ来て快たく我輩われらと朝中てうちゆうに呼よび莫な時とき我われ們ら入い朝てう彼から
 公主こうしゆの真ま假げと辯べんじ計策けいさくを設たてて師父しふと接せつて放はなち出いき
 三藏さんざう是こゝを聞きて點頭てんとう即すなはち行者ぎやうじやと引ひかたき宮女みやうにょ衆しゆう官くわん輦げんに
 導引だういんせし縁えん樓ろうの前まへふ到いたりぬハ公主こうしゆ樓ろうを下くだりて親おやしく三藏さんざう
 の手てを携たづせ同どうく宝輦ほうげんに登のぼり儀ぎ從じゆうと廻めぐりて朝門てうもんふ入い公こう
 主しゆ三藏さんざうと相挽あひひつて金鸞きんらん殿てんふ登のぼり父君ふじん白しろ帝ていを拜まじ則すなはち
 今いま日にち秀しゆ球きゆうと一個いっごうの和尚わうしやうふ打うち當あつる由よしと奏そうしつて國王くわうこく王わう公こう
 主しゆの和尚わうしやうふ球きゆうと當あつる由よしと聞きて心中しんちゆう一向いっかう小せう悟ごをば日にち三藏さんざう
 と宣のたまひて問とて曰いはく你なんぢが摸も樣やう此こゝ國こくの個ひとふ非あらば日にち你なんぢ那な國こくの僧そう
 小せう亦また何なにの幹かん有あつて此こゝ處ところふ来きつるや三藏さんざう拜まじ伏ふせと曰いはく
 貧僧びんそうの南なん瞻せん部ぶ易えき大だい唐たう白しろ帝ていの旨しめを領りやうし西せい天てん大だい雷らい音おん寺じ

に到いたり佛ぶつを拜まじ徑ぎやうを求もとむる僧そうり関文かんぶんを倒かつ換かへんと欲ほすこゝ
 十字街じゆうじ縁えん樓ろうの下したを過よぎ不ふ期きも公主こうしゆ娘むすめ々の王わう秀しゆ球きゆう貧びん
 僧そうが頭かう上じやうに當あつて候まちふる然しかども貧僧びんそうの出家しゆがと云いふ亦また異い御ご
 の人ひと心こゝろ塵ちん取とりて玉ぎよく葉えつ金きん技ぎと配あい偶ぐと做なさんや万ま均くわん王わうの貧びん僧そうが
 死し罪ざいを赦ゆるし関文かんぶんを倒かつ換かへて快たく靈山りやうざんふ赴まりぬハ國王くわうこく
 曰いはく你なんぢの乃なち東とう土どの聖せい僧そう正せいに是こゝ千里せんり管くわん姻いん使しと云いふ率しゆつと
 云いふのらつと今いま日にち公こう主しゆ良りやう辰ちんと擇えらんで佳か偶ぐと求もとめ縁えん球きゆうと
 以もつて你なんぢ小せう中ちゆう是こゝ天てん縁えん有ある小せう似にたり唯ただ不ふ知し公こう主しゆの意い思し何なに
 公こう主しゆ前まへへ出いで答こたへて曰いはく常じやう言ごん鷄けい小せう嫁けをば鷄けいと逐おひ大だい
 小せう嫁けをば大だいと逐おひと云いふと妾めかけ今いま天てん地ち小せう祈せい誓せいを做なし今日けふ債せう
 伴ばん小せう聖せい僧そうを得えるは是こゝ則すなはち前まへ世せいの縁えんを万ま望ぼうの他たを招まじ

さて駒馬と倣候人國王是と聞始めて歡喜の色も天發
 急ぎ欽天監と宣て日を擇吉と傳へく天下に曉諭め
 たる二藏是と看て取て恩を謝せば一向哭さく救ふ人
 救ふ人と計て云々ふと國王大い小餐て曰く這和尚甚
 もつゝ理小通せに朕一國の富貴を以て你を招く駒馬と
 倣何の為小同心せざるぞ再び辞せを錦衣官と呼来と
 立地小你を斬ん二藏大い小驚き説得魂一向小身に不
 附戦ひ競して曰く負僧今天恩を蒙り那ぞ敢く否と
 奉らんや但負僧小三個の徒等あり今馱館小居り万
 望の他輩を朝中に宣みひ関文と換て靈山小遣佛と
 拜し經文を取らぬ國王是と聞り急ぎ官負と宣て吉

と傳へ馱館小遣唐僧の徒等們を呼らぬ却説行者
 の縁樓の下にて二藏と引別と一足歩て打笑ひ二歩去て
 の打笑ひ口をも住に笑ひながら馱中に飯とらして八戒僧
 問て曰く長兄何を然やを小懽喜笑や師父の志慮して
 飯とらぬぞ行者曰く師父の十字街縁樓の下小公主
 娘々の誘迷小打當らと許妾の官女大監們師父を困
 繞八公主と同車にて朝小入ひ頃て駒馬と成ぬんと此這
 般の好々大我曾て看る変り八戒是を聞酌た相
 悔して曰く快く這般の事を知を我管に往べき小却て汝
 僧が阻故此好変を失ひり我若縁樓の下に到り誘迷
 と老猪が頭小打中らと彼公主我を招りて駒馬と倣を

對相應の夫婦世間更無比ひく當小你輩大家造化るん僧
 則ち八戒を臉と換て曰く你が這嘴臉を以て秀迷小打中ら
 此を他輩驚き一斎小捧を以て追出さん你が八主の騎馬
 思ひも依に八戒曰く此黒子更に赴きを知れ我像醜
 と雖も却て大い小風味あり行者曰く歎子乱説を云更な
 る快く行李を取收よ師父我を呼ぬる快く朝入
 く守護とて八戒曰く長兄尚候てると師父駢馬と成ぬ
 つ白皇帝の女兒と宮裡小在て歡樂ぬ亦山水を渡
 妖精小偶我輩が守護と要めぬ小非に師父已小四十
 余歳公主も亦二十歳より俱小夫婦の事情と知べ那ぞ
 我輩が幫杖を要めんやと這們三個同口哄語居候へ

勿心ち一備の官負子入末と國王の上旨と傳へ徒等們を宣ぬ
 ふろと呼つらる小ぞ行者們三個の旨に従ひ官負輩と打
 列立遂小三個一斎に朝中に赴きたり

池清

池清

